

巻頭言

「地域の発見」 「協同の発見」 の楽しさ

飯島 信吾

(シーアンドシー
出版代表)

◆地域の発見の楽しさ 最近の私の楽しみは、東京以外の「地域で生きている」人たちとの出会いである。東北協同集会に向けて、本誌でも紹介された「会津の喜多方、三島町、昭和村」の「文化を通じた仕事おこし、半径1時間（車社会のメリット）の範囲のネットワーク的つながり」をルポするために、柴野徹夫さんと訪問した。それぞれの地域で「東京の消費文化」をのりこえて、地域社会に根づいた情報発信を行っている。そこには、日本各地からだけでなく、世界各地から人びとが訪れ、相互交流と独自の文化ネットワークを築いている姿がある（詳細は『仕事の発見』誌、96年11月号参照）。

驚いたことには、この地域に注目してこの20年間、ボランティア的に貢献している研究者・文化人が、多数いることである。その一人に今回「大佛賞」を受賞した山口昌男氏が、「昭和村」に自らの文庫を建設中であった。氏は、この夏、昭和村で井上ひさし氏と対談して、山形県川西町に建設した井上さんの「遅筆堂」に共鳴し、その構想を語り合っている。

「消費文化」の中心である都会では、このようなビッグな「対談」を設定しようとするに「数十万円」の費用と有名な媒体（たとえば雑誌）を持っていないと不可能である。それを高齢化率40%を越える人口2000人ほどの、昭和村職員がなしえているわけだから、立派である。その上で、私たちが学ばなければいけないのは、この「過疎」の町や村に、多数の研究者・文化人が注目し、調査し、助言している姿である。そして、「都市社会」に生きている人びとに「人間復興」的メッセージを送り続けていることである（本誌9月号の「百姓の生き方」の新しさの提起は、また同じ質を持っているということも、無茶々園など各地の百姓の人びとと出会った私の実感である）。

協同総合研究所創立の意義として、また「地域づくり」というキーワードからいっても、当然の役割が求められているのではないか。

◆協同の発見の楽しさ 私は「編集者は自ら文章は書くべきではない」と教わった最後の世代の一人かもしれない。先輩たちは、原稿を抱え、夜毎、付箋を付けて、執筆者にきびしい注文をつけていた。「なるほど、これが編集者生活か」と感心したものである（その禁を打破したのは「本の雑誌」グループの椎名誠氏からかもしれない）。しかし本とか雑誌に携わっているものとして、実は「執筆者の問題意識とそれを表現する文章力」の問題が、勝負を決めるのではないかという思いが強い。

久しぶりに単行本編集を強めている現在、『高齢者協同組合はなにをめざすのか』（高瀬毅著）を発刊したが、そのなかで、かれが「路地裏からのか細いシグナルから考える」と提起したジャーナリストの視点は、今日の公的行政優位論に陥っている人びとの見方ではない、「時代を協同の視点から見直す生き姿」がある。だから「高齢者協同組合」は、未来からの風であり、私たち時代の明日のために、今日、澎湃として全国にわき起こっていると、とらえることができたわけだ。

東北における協同集会は、その未来からの風を受け止め、「よりよく生きるために、よりよく生きたい人たちの発見」のために重要である。